キム　*Kim, the ballbuster by HIGHKICK*

十四歳にして、キム・シュラーブは素晴らしく発達した乳房の持ち主だった。僕らは、胸が豊かな女性を見る度に「キムみたいだね」と言い合った。キムは、巨乳の別名として使われていたのだ。

一メートルは越えてるんじゃないか。僕らはそう噂しあった。彼女は身長が一五〇センチたらず、ほっそりしたやせ型だったため、乳房の大きさは余計に目立った。灰色の眼に華やかな金髪、小悪魔のような魅力的な容貌をしていた。

彼女は、自分の魅力を利用することに長けていた。わざとブラウスのボタンをはずして豊かな乳房や深い谷間をちらつかせ、男の子たちを惑わせるのだった。彼女が歩く度に、ブラウスからかいま見える大きな乳房が激しく揺れた。男の子たちは皆、彼女に近づきたがった。だが、彼女は、男の子たちを寄せつけなかった。「ほんとうにいい男に会うまでは処女を守るの。子供を相手にする気はないよ」というのが彼女の口癖だった。

当時、僕は六年生。十六歳だった。二学年下のキムについては、早熟た不良娘という印象が強かった。

以下は噂話である。

あるとき、大学生が僕らの学校に教育実習にやってきた。化学の教師を目指していた。

キムは、何時ものようにわざとブラウスのボタンを外し、胸の谷間を見せつけながら教室に入った。教育実習生は、ブラウスのボタンを留めるように彼女に命じた。だが、キムは彼の真ん前に立ち、ボタンを一つ外し、ベリーダンサーのように体を横に揺すぶった。彼女の乳房が大きく揺れた。教室にいた男の子たちは全員勃起しただろう。蓮っ葉な女の子が叫んだ。

「あー、先生、大きくなってる！」

教育実習生は赤面し、笑い声から逃れるように教室を出たという。

六年生になると、この地方の各学校から成績優秀な生徒が選抜され、夏休みに合同で合宿が行われる。教室のほかに宿泊施設やレクリエーション設備のある宿舎に集められ、みっちりと勉強するのだ。

選抜された生徒は、ＲＯＳＬＡ（Raising of the School Leaving Age）と呼ばれ、たいへんな名誉とされる。その夏、僕がＲＯＳＬＡに選ばれたと聞いたときには、天にも昇る心地だった。

同じく選ばれた仲間たちとともに、バスに乗ってＲＯＳＬＡの宿舎に向かった。バスが出発しようとしたとき、必死に走ってくる小柄な少女が見えた。

キムだった。キムは息を弾ませてバスに乗り込み、空いた座席に座りこんだ。息が荒れていた。呼吸をする度に、ブラウスの下に膨らんだ豊かな乳房が大きく上下した。

僕らは顔を見合わせた。キムがこちらに気づき、「やあ」と手をあげた。

驚いたことに、キムは四年生にもかかわらず、成績優秀であるという理由で、ＲＯＳＬＡに選ばれたのだ。十数年前に、五年生が選ばれたことがあるというが、それ以来の快挙。ＲＯＳＬＡ史上、最年少の優等生ということになるんだろう。

ＲＯＳＬＡは、思春期の男女の出会いの場でもある。

各学校から選ばれたきらびやかなエリートたちの間には、この地方で有名なスポーツ選手や、チアリーダーなどもいて、当然、そういう連中の周囲には自然に人垣が出来るのだった。

キムも、そういう「注目の的」の一人だった。「お前の学校にいるっていう、胸の大きなコって、彼女か？」と他校の生徒から訊ねられたこともあった。

だが、キムは、彼女目当てに近づいてくる男の子たちには目もくれなかった。なぜか、彼女は僕と一緒にいることが多かった。僕は内気で、人見知りをするもの静かな少年だった。かえってそれが、「ほんとうにいい男に会うまでは処女を守る」というキムに安心感を与えたのかもしれない。

休憩時間に、僕らはグラウンドで野球をやった。キムも参加した。

キムがヒットを放ち、一塁ベースに立った。僕はショートストップをやっていた。次のバッターはセカンドゴロだった。ダブルプレーコースだった。セカンドをやっていた友人がボールをキャッチし、二塁のベースカバーに入った僕に投げた。

ふと、ボールをキャッチし、一塁に投げようとして、ランナーのキムがこちらに向かって走ってくるのが目に入った。ブラウスのボタンが上から二つ三つ、外れていた。大きな乳房が前後左右に揺れていた。僕は狼狽した。一塁めがけてボールを投げたつもりが、見当違いの方向に飛んでいってしまった。暴投だった。おまけに、二塁ベースを踏むのを忘れていた。一塁手がとんでもない方向に投げられたボールを拾っている間に、キムがホームベースまで到達した。

授業が終わり、夕食を終えた後、僕らはトランプを始めた。キムの隣に座っていた少年が、僕の大エラーを話題にしはじめた。

「ま、しょうがないよな。ランナーがキムじゃね」

キムがそいつを睨み付けた。そいつは、キムの胸を覗き込むようにして言った。

「そのおっぱいだもんな」

キムが喉の奥で、低い唸り声を発した。僕らはお互いに顔を見合わせた。

次の瞬間、キムは姿勢を低くして、そいつの股間に思い切り肘を叩きつけた。少年は体を前に折り曲げ、椅子から転げ落ちた。股間を両手で覆い、床を苦しげに転げまわった。キムは、彼の睾丸に肘鉄を食わせたのだ。

それ以来、僕の友人たちはキムを警戒しはじめた。なんとはなしに、キムと一緒にくっついているのは、僕だけになった。

昼休み、僕がキムと喋っていると、ケヴィンという大柄な黒人の少年が近づいてきた。ケヴィンは、他の学校のバスケットのヒーローで、女の子たちの憧れの的だった。

「ケヴィンだ、よろしく」

彼は僕は無視して、キムを見つめて言った。

「こんにちは」

キムはそっけなく答えた。ケヴィンはにやにやしながら、

「後で話をしないか。僕の部屋は三〇五号室だ」

と告げて去っていった。そう言えば、女の子は必ず自分の泊まっている部屋を訪れるという確信を持っているようだった。

「変な奴」

キムは笑ったが、その眼には何か奇妙な情熱が宿っていた。僕は、意を決して訊ねた。

「行くのか？」

「どうしようかな……」

キムは悪戯っぽく笑った。

僕の泊まっていた部屋は三階にあり、ケヴィンの部屋と同じフロアにある。僕は、ベッドに入ってからも、なんだか気になって落ち着かなかった。まさか、キムがあんなにやけた男の言いな

りになるとは思いたくなかった。だが、ケヴィンは、筋骨隆々として逞しく、白人の血を引いていて二枚目だった。キムの大きな乳房が、あの黒い手に揉みしだかれている情景を想像するだけで、頭に血がのぼってくるのだ。

コーラでも飲もうと、僕は部屋を出た。と、ケヴィンの部屋のドアの前に、キムが立っているのが目に映った。彼女は、ぴったりしたタンクトップに、小さなジーンズのパンツ、すらりとした脚と、豊かな乳房を半ば剥き出しにしていた。

キムがドアをノックした。ドアが開いた。ケヴィンが出てきた。キムは満面に笑みを湛え、魅力的なハスキーヴォイスで言った。

「こんにちは」

ケヴィンがいやらしい笑顔で応えた。そのとき、キムの脚が撥ね上げられた。彼女の膝がケヴィンの股間に叩きつけられた。ケヴィンの目が見開かれた。キムはすかさず、二度三度、膝蹴りをケヴィンの睾丸に食わせた。

「おやすみ、黒んぼ」

股間を両手で抑えてうずくまったケヴィンに、キムは軽く手を振って去っていった。ケヴィンは目をつむり、必死に激痛をこらえてうずくまっていた。

翌日から、ケヴィンは授業に現れなくなった。病気で休んでいる、という名目だった。

それでも、キムに近づこうとする少年は後を絶たなかった。

スコットという少年は、そばかすだらけの丸顔で、分厚い眼鏡をかけていた。顔つきも醜いが、やることも不愉快な奴で、誰も彼には近づこうとはしなかった。

ある昼休みの時間に、僕はリラックス・ルームにいた。リラックスルームには幾つかのテーブルやソファが置いてあった。

「五セント貸してくれないかな」

顔をあげると、スコットがにやにやしながら立っていた。

「あっち行けよ」

僕は断った。彼にお金を貸して帰ってきた試しはないという評判だった。

「それにしても、彼女、いい胸してんなあ」

スコットが言った。視線の先にキムがいた。部屋の隅にはキッチンがあって、低い壁に遮られている。キムは、お湯を沸かしながら、ウェンディという女の子と喋っていた。

「それに、ケツのかたちもいい」

キムは僕らに背を向けていた。たしかに、その点は僕もスコットに同意できた。引き締まったヒップが、ぴっちりしたパンツに浮き彫りにされ、すんなりした長い脚が伸びている。

と、スコットは僕を離れ、キムに向かって歩きだした。キムの背中に立ち、いきなり腕を伸ばして彼女の乳房をつかんだのだ。

「何するの！」
キムが怒ったように言った。
次の瞬間、リラックスルームにいた全員が息をひそめた。鈍い音とともに、スコットの喉からうめき声が洩れた。彼の膝ががくがくとして今にも落ちそうになっていた。
キムは足を後ろに跳ね上げ、スコットの睾丸を踵で蹴り上げたのだ。
キムは静かに振り向いてスコットと向き合った。彼女の手がスコットの股間へと伸びた。
スコットが絶叫した。キムは、スコットの睾丸を右手で鷲掴みにして、ぎゅっとひねりあげたのだ。同時に、キムはスコットのパンツをずりおろし、股間を剥き出しにした。スコットの醜悪な性器――陰嚢は大きかったが、ペニスは小さく、包茎だった――がさらけ出された。キムは左手に陰嚢を持ちかえ、強く引っ張った。スコットが眼に涙を浮かべ、苦痛に泣き叫ぶのを楽しむように、キムは嘲りの笑みを満面に浮かべて気取ったふうに歩き回った。スコットは爪先だちになり、キムに従うしかなかった。
キムがやっと手を離したとき、スコットは幾分ほっとした表情になった。しかしそれも僅かの間だった。キムはすかさず、彼の股間を爪先で蹴りあげたのだ。
スコットは股間を両手で抑え、苦痛に体を折り曲げた。キムはその両腕をつかんで睾丸から引き剥がし、膝を叩き込んだ。スコットはたまらず床に両手をつき、四つん這いになった。キムは素早く彼の背後に回り、後ろから股間を爪先で蹴りあげた。スコットはうつ伏せに床にのびた。

キムはスコットの首を左腕でしめあげ、右手の拳を腎臓に打ち込んだ。そして、彼の胸ぐらをつかんで引っ張り起こし、またも股間に膝蹴りを浴びせたのだった。
スコットは床に倒れ、股間を両手で抑えて悶絶した。キムはその胸に跨がり、なおも股間に拳を叩きつけた。スコットは両手で股間をガードしようとしたが、キムのほうが早かった。彼女はスコットの睾丸を両手でつかみ、強く握りしめた。スコットは絶叫し、慈悲を乞うたが、キムは無慈悲にも攻撃の手を緩めなかった。嘲り罵りながら、五分間も睾丸を握った後、立ち上がって股間を踏みつけるように蹴り、それからスコットの顔面にも蹴りを浴びせた。スコットの鼻が砕け、顔じゅうを血にして、仰向けに倒れ、白目を剥いた。意識を失ったようだった。
キムは、失神したスコットの睾丸に足を載せた。見ていた僕は、睾丸に痛みを感じた。キムは、血まみれの醜い顔を見下ろしながら、冷やかな笑みを浮かべていた。彼女が、スコットの睾丸を踏み潰そうとしているのは明らかだった。僕は叫んだ。
「やめろ、キム！」
キムが僕の方を見た。射られるような視線だった。僕は喉まで出かかっていた声が引っ込んだ。
「そうよ。やりすぎよ」
キッチンでキムと喋っていたウェンディも叫んだ。
「私、先生を呼んでくる！」
キムはスコットから離れ、ウェンディに詰め寄った。ウェンディも負けずに睨み返した。今に

もキャットファイトが始まりそうだった。
そのとき、授業開始のベルが鳴った。キムが舌打ちした。
「運のいい奴……」
スコットを一瞥し、すたすたと教室に向かって歩きだした。リラックスルームにいた全員が立ち上がり、教室に向かった。誰もスコットを助けようとはしなかった。彼はそこまで嫌われていたのだ。僕もリラックスルームを出ようとしてふと振り向くと、さきほど、先生を呼んでくると言ったはずのウェンディが、スコットの股間に踵を載せ、ぎゅっと力をこめた。嫌な音が響いた。スコットは声もあげず、ただ痙攣した。僕は、見なかったようなふりをして教室を出た。
それ以後、スコットは姿を消した。どのように「事件」が「処理」されたのかは分からない。誰も、目撃談を話そうとはしなかった。キムは何事もなかったかのように授業に出た。小テストでは、キムが六年生を押し退けてトップの成績を収め、教師から絶賛された。

三日後だった。昼休み、僕は宿舎に近い売店にいた。そこに、キムが入ってきた。
暑い夏の日だった。キムはミニスカートに、例によって胸元のボタンをはだけたブラウスだった。彼女のほっそりした骨組みと、対照的に盛り上がった乳房が強調されていた。僕は彼女よりかなり背が高かったから、ブラウスの胸元から乳房の谷間がよく見えるのだった。彼女と一緒にいる度に、僕のペニスは勃起した。

キムは軽く手をあげてにこにこしながら何時ものような親しみを見せて僕に近づいてきた。僕は手をあげて応えたが、内心ひそかに狼狽した。彼女を見た瞬間、僕のペニスは勃起を開始した。そのことを気づかれるのを極度に恐れた。スコットのような目にあうのは御免だった。
買い物を終えてキムと並んで店を出た。通りを歩いていると、向こうから三十代半ばらしい大男が現れた。偏平な顔のアジア系だった。剥き出しの腕に刺青があった。彼はいきなり僕を突き飛ばした。僕はよろめいて道路に尻餅をついた。
大男は、キムの肩に手を載せ、にやにやしながら何か言った。キムはにっこり微笑んで男を見上げた。
次の瞬間、キムの膝が大男の股間に叩きつけられた。男は口を開けた。目が今にも飛び出しそうだった。キムはすかさず、三度、続けざまに膝蹴りを男の股間に浴びせた。男は両手で股間を庇おうとしたが、キムは男の腕をつかんで振り払い、今度は足の甲で男の睾丸を蹴りあげた。
男は白目を剥き、がっくりと地面に膝をついた。キムはその顔面を蹴りあげた。男の鼻柱が折れ、鼻血が噴き出した。
身長一八〇センチ、体重は百キロを超えていそうな、スモウレスラーのような大男が、身長一五〇センチ、体重四〇キロ足らずの十四歳の少女に叩きのめされているのを、僕は地面にしゃがんだまま、ぼんやりと見つめていた。
スコットやケヴィンと違い、大男は凶悪な顔つきだった。喧嘩なれしていることは、剥き出し

の腕や肩に残る傷痕でも見てとれた。だが、男は涙を流しながら、間断なく続くキムの攻撃に必死に耐えているばかりだった。

キムが男の脇腹に蹴りを浴びせた。男は両手で脇腹をかばった。次の瞬間には男の股間にキムの蹴りが飛んだ。男はうつ伏せに倒れた。キムは肋骨に蹴りを浴びせた。男は苦しげに転げまわった。男が仰向けになると、キムはみぞおちを踏みつけた。男が体を折り曲げて背中を向けると、キムは男の髪の毛をつかんで顔を起こし、血まみれの折れた鼻柱に膝頭を叩きつけた。続いて男の唇を蹴った。男の歯が折れ、道に飛び散った。男は両手で顔を覆った。キムはすかさず背後に回り、後ろから股間を蹴りあげた。ぶちっと嫌な音が響いた。ウェンディがスコットの睾丸を踏みつぶしたときと同じ音だった。

男はもはや抵抗する気力も残っていなかった。片手で血だらけの顔を、片手で股間を抑え、地面に這いつくばって悶絶した。体が細かく痙攣していた。

「……汚ならしい黄色い猿」

キムはそう呟いて立ち上がり、ふと僕を見て、微笑んだ。ぞくりとするようなセクシーな微笑みだった。目がぎらぎらと輝いていた。

彼女は楽しんでいたのだ！

スコットを叩きのめしたときに見せた憎悪の表情ではなかった。キムは楽しんでいた。男のうめき声は、微かな嗚咽に変わっていた。そして嗚咽はしだいに弱々しくなっていった。意識を失

おうとしているのか、それとも、死へと向かっているのか。

「そろそろ、行こうか」

キムが静かにいった。声音は平静そのものだった。僕はやっと頷いた。

キムは僕の腕をとって引っ張って起こし、それから僕と腕を組んで歩きだした。まるで、恋人同志のようだった。

ＲＯＳＬＡが終わりに近づいた。

授業が終わった後、生徒たちは一人ずつ講師陣のリーダー役であるウィリアムズに呼ばれた。ウィリアムズは四十五歳。精悍な顔だちで、権力志向を隠さない人だった。

僕は、ウィリアムズにこれまでの成績について解説された。「まあまあだが、もっと努力するように」ということだった。

ウィリアムズの部屋を出て夕食をとり、部屋に戻ろうとして、忘れ物に気づいた。僕はウィリアムズの部屋に引き返した。ドアをノックしようとして、ドアが少し開いているのに気づいた。

「意味が分かりません」

部屋の中から声がした。キムの声だった。僕は足を止めた。

「分からないはずがないだろう」

ウィリアムズの声だった。微かな苛立ちが混じっていた。

「君はケヴィン・コンロイを負傷させた。スコット・ノーマンはまだ入院中だ。本当なら、君は手のつけなれない乱暴者としてＲＯＳＬＡから追放されてもおかしくない。現に、そういう意見を述べる講師もいた。その声を抑えたのは私だよ」
ウィリアムズはいったん言葉を切った。キムは無言だった。
「一週間後、お別れパーティがある。午後八時にここに来たまえ」
それから沈黙が続いた。誰かが立ち上がる音がした。僕はさっとその場を離れ、廊下の曲がり角に身を隠した。
キムが出てきた。ドアを閉め、こちらに歩いてきた。僕は、何もなかったかのような顔を作り、曲がり角から姿を表した。キムが、不審そうな顔で僕を見た。
「ウィリアムズさんの部屋に忘れ物をしちゃったんだ」
僕はそう弁解した。キムはにやりとして立ち止まった。
「聞いてたんでしょ」
「え」
「あのボンクラは気づかなかった見たいだけど、ドアの前で足音がしたもの」
僕は硬直した。キムは僕の肩を叩き、去っていった。

お別れパーティの日がきた。

キムは、胸を大きく開けたボディ・コンシャスな黒のワンピース、剥き出しの脚にハイヒールを履いて現れた。豊かな乳房、細くくびれたウェスト、腰から太股にかけてきれいに描かれたなだらかなラインが強調されていた。
キムははしゃいでいた。僕はそんな彼女を遠くから見つめるだけだった。生徒たちのなかに、ケヴィンの姿が見えた。もう怪我は直ったのだろうか？　彼はじっと、憎しみの籠もった目でキムを見ていた。
キムはすっかり酔っぱらっていた。僕は気が気ではなかった。パーティの席にウィリアムズの姿はない。彼女は、命じられたとおり、彼の部屋に行くのだろうか？　ウィリアムズは、彼女がスコットやケヴィンを負傷させたことを伏せておくことと引換えに、彼女の体を要求していることは明らかだった。
ふと時計に目をやると八時だった。僕はキムの姿を探した。いなかった。
僕は、一緒に飲んでいた友人に「ちょっとトイレだ」と告げて、パーティルームを飛び出した。
僕は廊下を走った。
ウィリアムズの部屋へと。
ウィリアムズのドアが視線に入ってきた。ドアは半ば開いていた。
僕は立ちすくんだ。

ドアから部屋のなかが伺えた。
ウィリアムズは、僕に背を向けて立っていた。そして、大きな彼の背中に隠れるようにして、キムが立っていた。
彼女は、左手をウィリアムズの肩に回し、片手で彼の股間をまさぐっていた。ウィリアムズは彼女に覆いかぶさって、片手で彼女の乳房を揉んでいた。
キムが僕に気づいた。彼女は微笑み、ウィンクしてみせた。僕はどきりとした。
――明らかだった。彼女はウィリアムズに身を任せる気はない……。
心臓が高鳴った。キムは、どんな手で、ウィリアムズを、ケヴィンやスコットや、あのアジア系の大男たちと同じ目にあわせようとしているのか。

キムは膝まずき、ウィリアムズのズボンのベルトを外し、ズボンとパンツをずりおろした。ウィリアムズの下半身が露になった。キムはウィリアムズの怒張したペニスを握りしめ、軽くしごいた。ウィリアムスがため息をもらした。
キムは彼のペニスを握りしめたまま立ち上がり、右の膝を軽く彼の股間にあてがって、さすった。ウィリアムズが気持ち良さそうなため息をついていた。
キムが微笑んだ。次の瞬間、キムの右の膝が、勢いよくウィリアムズの剥き出しの睾丸に叩きつけられた。

ウィリアムズの背中が硬直した。キムはもう一度、彼の股間を蹴りあげた。ウィリアムズは悲鳴をあげ、股間を両手で抑えて体を前に折り曲げた。その顎をキムは蹴りあげた。ウィリアムズは仰向けに倒れた。キムは、彼の胸に跨がり、尻を押しつけ、両手で彼の睾丸を握りしめた。ウィリアムズは手足をたばたさせながら叫んだ。
「何をするんだ……雌犬！……こ、こんなことをして……」
キムがぎゅっと睾丸をひねった。ウィリアムズは絶叫した。
「静かにして、暴れると潰すよ！」
キムが怒鳴った。ウィリアムズは黙った。喉をぜいぜいならし、この凶暴な少女が次に何をする気なのか、恐怖におののいていた。
「もっと気持ちよくなりたいと思わないの？」
キムは静かに言った。彼女は睾丸から手を離し、右手で彼の萎れたペニスを愛撫しはじめた。いかにも慣れた手つきだった。ウィリアムズのペニスが再び膨張しはじめた。彼は目を閉じ、キムの右手がもたらす快楽に喘いだ。
「嘗めてほしい？」
キムが言った。ウィリアムズは「嘗めてくれ」と呟いた。
「嘗めてください……でしょ？」
「嘗めて……ください……」

「ふふ」
キムは微笑み、ウィアリムズの股間に顔を伏せた。
「ぎゃあああああ！」
ウィリアムズが体を反らせて絶叫した。キムは、彼のペニスに噛みついたのだ。
キムが顔をあげた。ウィリアムズのペニスに歯型が刻印され、血が吹き出していた。キムは続いて彼の睾丸を一つ、口に含んだ。ウィリアムズがまた絶叫し、顔を恐ろしく歪めて手足をばたばたさせた。キムは、ウィリアムズの睾丸を噛み砕こうとしているのだ。
僕は決心した。これ以上、放っておいたら彼女は確実に犯罪者だ。
僕は部屋のなかに駆け込み、キムを突き飛ばした。キムは床に尻餅をついた。
「やめろ、キム！　もう十分だろ！」
ウィリアムズは血が吹き出す股間を両手で抑え、床をのたうちまわっている。キムは凄まじい形相で立ち上がり、僕を目掛けて突進した。蹴られる……。僕は思わず目をつぶった。
だが、おずおずと目をあげたとき、目の前でキムが僕を見上げていた。
「私の膝は、あなたの股間まであと二センチよ」
視線を落とすと、彼女の膝が僕の股間の寸前まで蹴りあげられていた。
「もし、邪魔するなら、あんたも金玉とはおさらばよ。いいの？」
僕は、無我夢中でうなずいた。キムはにっこりして僕の頬にキスをし、それから悶絶するウィ

リアムズへと向かった。僕はへなへなと床にしゃがみこんだ。
キムは再びウィリアムズの胸に跨がり、拳を固めて彼の睾丸に叩きつけた。ウィリアムズは目を剥き、絶叫した。キムはもう一度、睾丸を殴った。ウィリアムズはもは叫ぶ気力もなく、痙攣し、ひいひい泣きわめくだけだった。キムはなおも容赦なく拳を次々に叩きつけた。ウィリアムズの反応は次第に弱くなり、やがてぐったりとなった。内出血した陰嚢が膨れ上がっていた。キムは立ち上がり、陰嚢に踵を載せ、思い切り体重をかけた。陰嚢が破裂した。血と液体が飛び散った。その液体に混じって、潰れた葡萄のような睾丸が流れ出た。
嫌な匂いが部屋じゅうに立ち込めていた。キムは、ウィリアムズの股間に返り血を浴びた足を載せたまま立ち尽くしていた。
やっちゃったな……。
僕は何をする気力もなかった。キムが、男からその根源的な能力を奪い去るのを見たのは三度目だった。十四歳の彼女は、自分を襲う暴力や権力に立ち向かい、二度と立ち直れない傷を与え、完膚なきまでに粉砕した。そして、僕は傍観者でしかなかった。
足音がした。振り向くと、ドアのところにケヴィンが立っていた。目を見開き、異様な光景に立ちすくんでいた。
「やあケヴィン、玉を潰されに来てくれたの」
キムが嬉しそうにケヴィンに歩み寄った。度肝を抜かれたケヴィンの股間を膝で蹴りあげた。

ケヴィンは呻いて床に突っ伏した。キムはその後頭部に手刀を浴びせた。ケヴィンは失神し、床に這いつくばった。キムは彼のズボンを脱がせ、剥き出しにした睾丸を握りしめた。

鋭い激痛にケヴィンは意識を取り戻した。手足をばたつかせ、泣きわめきながら恐ろしい魔の手から逃れようともがいた。だが、キムは彼の陰嚢をつかんだまま放さなかった。やがて、あの嫌な音が響き、ケヴィンは失神した。キムはケヴィンを仰向けにして、睾丸に踵を載せ、踏み潰した。

キムは爪先で、睾丸が完璧に潰れたかどうか確認するかのように陰嚢をつついていたが、満足そうに顔をあげ、僕を見た。

キムの目が野獣のようにぎらぎらと輝いていた。こみ上げてくる欲情を抑えかねるように、キムは両手で自分の体を抱きしめ、身震いした。乳房の谷間が激しく揺れた。

僕は立ち上がった。彼女が発狂したと思った。キムは僕をじっと見据え、静かに歩み寄った。僕は後ずさりした。

キムの小柄な体が跳躍した。追い詰めた獲物に襲いかかる俊敏な肉食動物のようだった。キムは僕に抱きつき、僕の唇に自分の唇を押しつけた。彼女の弾力のある豊かな胸が僕の胸に押しつけられた。当時に、僕の股間に重い衝撃が走った。

キムが僕の股間を蹴りあげたのだ。生まれて初めて味わう激痛だった。激痛と、嘔吐がこみ上げた。膝ががくがくと落ちそうになった。

「動いては駄目」

熱い吐息が僕の耳を襲った。キムは僕を抱きしめたまま壁に押しつけ、ズボンのジッパーをおろし、手を滑りこませた。

キムは巧みに、きりきりと痛む睾丸に触れぬようにして僕のペニスを握りしめ、しごいた。激痛とともに、信じられないほどの快楽が僕の全身を貫いた。

キムは貪るように、僕の唇や、耳や、顎を嘗めながら、僕のペニスをしごいた。やがて彼女は膝まずき、股間に顔を寄せた。

僕の怒張したペニスが、ねっとりと温かいものに包まれた。キムは、僕のペニスをくわえ、頭を上下させはじめた。同時に、片手で僕の陰嚢を弄んだ。

激痛と快感が、大きな波のように押し寄せた。頭が痺れた。僕は目を閉じ、彼女の攻撃的な愛撫に身を任せた。

やがて彼女は僕を押し倒し、僕の股間に跨がり、腰を沈めた。

ＲＯＳＬＡが終わったあと、キムは遠くの学校に転校した。あの悪夢のような夜、彼女に股間を蹴られ、童貞を奪われた夜以来、僕は彼女に会っていない。睾丸を潰されたウィリアムズやケヴィンの噂も耳に入ってこなかった。

その年の夏休み、キム・シュラーヴが最年少で東部の名門大学に合格したニュースが全米に広

がった。テレビに登場したキムは、豊かな胸を目立たせないような、ぶかぶかしたおとなしめのシャツを着て登場した。胸を隠した彼女は、とても知的な容貌に見えた。インタヴュアーとの受け答えにも、あの蓮っ葉な面影はなかった。

新学期の開始とともに、彼女はメディアには登場しなくなった。だが僕は確信している。かの名門大学では、教授か、学生か、誰かが確実に不能にされている。そして、何故か彼女の不可思議な力によって、その事実は隠蔽されてしまうのだ、と。